

永井路子

朱なる十字架



文春文庫

朱なる十字架

定価はカバーに
表示してあります

1978年12月25日 第1刷

1993年7月15日 第18刷

著者 永井路子

発行者 堤 堯

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-720004-X

文 春 文 庫

朱 な る 十 字 架

永井路子

文 春 秋

朱なる十字架

眼を伏せると、まつげが白い頬に濃い翳^{かげ}を作った。唇の紅味が薄いせいだろうか、そのときだけ、ふっと淋しげな顔立ちになる十六歳のお玉であった。が、そのことに気づいている人間は、坂本城の中にも、ほとんどいないのではあるまいか。眠っているとき以外は、その瞳は、たいたい大きく見開かれ、くるくるとよく動き、そうなると、うってかわって、いきいきとした、はやかな表情になるからだ。

いや、よく動くのは瞳だけではない。どんなときにも、じっとしてはいられないたちで、数年前、新しく築かれたこの坂本城に移って来たときも、まだのびきらない黒いうない髪をさらさらさせて、早速^{さっそう}ばしこく城の中を飛び廻って、

「女の子は、もっとおとなしくしていなければなりません」と、母にたしなめられたものだ。

が、坂本城のお姫さまとして、作りもののようにちんまりおさまりかえるにしては、お玉は無邪気すぎ、好奇心が強すぎた。

元龜三年、近江坂本に築かれたこの城は、お玉の父、明智光秀が、四十五歳にして、はじめて

得た居城である。中年過ぎるまで不遇な流浪生活を送った彼が、めきめき運に乗って来たのは織田信長に仕えるようになってからで、闊達奔放な主人のもとで、周到な行政能力や頭腦的な用兵手腕があますところなく発揮され、十年と経たぬうちに、早くも城持ちになった。光秀にしてみれば少なからぬ感慨があったことだろうし、父の流浪時代を知っている上の娘たち、お倫、お菊、お秀たちには、いよいよ城主の娘になるのだという身のかまえもあったろうが、当時十歳になるやならずのお玉には、そんな意識は毛頭なかった。その彼女がこの城でいちばん気にいったのは天守閣である。無理もない。当時はまだ天守のある城は、ほとんどなかったのだから。

天守からの湖の眺めは、とりわけすばらしかった。この城は、当時岐阜にいた信長が、都に進出するために築いた前進基地であり、かつ湖上作戦をまかされていた光秀の指揮台として、天守は重要な意味を持っていたが、そんな事にはおかまいなしに、お玉はよくこの天守に上った。父に、

「むやみに上ってはいけないぞ」

と言われても、いつかこっそり上っているお玉に、姉たちは、何度やきもきさせられたことが、ことし——天正六年の新春のお玉は珍しく神妙である。眼を伏せるとふと淋しげにみえる顔をうつむけて、今日も手習いに余念がない。

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん

「古今集」巻一の春の歌は、もう何枚も書いては棄て、書いては棄ててあった。それでも倦きもせず、おとなしく筆を動かしているのにはわけがあった。十日ほど前に、父の光秀から、この秋のはじめに、お玉もいよいよ花嫁となって嫁がなければならぬことを告げられたからである。その話を父から聞いたのは、正月十一日、城中で茶会が行われた後であった。客は堺の納屋衆なやしやうの津田宗及つだそうぎやうたちで、信長から与えられた八角釜がその席で披露された。宗及は堺でも指折りの豪商、天王寺屋の当主で、茶を通じて光秀や信長に結びついていた。というより、茶は名目で、お互が富と権力を利用しあうための連携であったが、特に三年前、安土に信長が壮麗な城を築いてからは、宗及は、正月には、坂本の茶会のあと、城内にひきこまれた堀から船にのりこみ、琵琶湖を渡って安土に向うのをしきたりとしていた。

お玉が茶室によばれたのは、宗及たちが発ってからまもなくである。まだ人の気配の残る中にひとり端坐していた父光秀は、

「これが拝領の八角釜だ」

よく拝見するように、と静かに言い、ゆっくり茶を点たてると、黙って茶碗をお玉の前においた。彼がふたたび口を開いたのは、お玉がその茶をすっかり飲みおえてしまってからである。

「お玉、そなたいくつになった」

「十六でございます」

「ふむ」

うなずいてから、ものやわらかな口調で、

「十六ともなれば、もう男は一人前の働きをする」

「……………」

「去年の秋、大和の松永久秀を攻め落したときのことだが、久秀の属城をわしといっしょに攻めて、上さまから感状を頂いた若者がある」

「……………」

父の瞳が、じっとお玉にむけられた。

「その若者と、そなたと縁組みするようにとの上さまの仰せであった」

「……………」

「元旦、御挨拶にまかり出たとき、上さまはそう仰せられてこの釜を下された。してみると、この釜は、引出物のおつもりかもしれぬ。それゆえ、いま、そなたに茶を点ててつかわしたのだ」
が

言われても、まだ、お玉はきょとんとした眼付で、父を見守っている。

「わかったな、お玉」

「はい、でも……………」

やっとお玉は口を開いた。

「でも？ どうしたというのだ」

「お嫁にゆくというのは、うれしいことだ、と聞いております」

丸い眼を大きく見開き、大まじめな口調でいうお玉に、光秀は微笑した。

「そうだとも、女の一生の大事だ。よろこばしいことだ」

「でも、父上」

お玉は、ひどくふしぎそうに言った。

「私は、そんな晴れがましい花嫁になるのは、先の先のことだと思っておりました。いま、父上がそう仰せられましても、うれしいのやら何やら、よくわかりませぬ」

われとわが心の動きにいぶかっているような黒い瞳の前で光秀の頬がゆるんだ。

「そうだろうとも、それでいいのだ。お玉、誰でも初めはそう思うものだ」

「お姉さま方もみんな？」

数年前嫁いでいった姉たちのことをたずねると、光秀は笑いながらうなずき、

「そうとも、そうであつたに違いない。だが」

しだいに嚙んでふくめる調子になった。

「ただ、そなたのように、それを口にはしなかったな。が、いま、お玉は何やらわからぬと言つた。いかにもそなたらしい正直さだ。しかし、嫁いでしまえば、しだいにそのようなことは口にしなくなるだろうな」

それが大人になるということでもある、となかば呟くように言う父の口許を、お玉の丸い眼は、まじまじとみつめていた。

光秀は、夫となるのは細川与一郎忠興だ、とお玉に告げた。

「細川家のことは聞いたことがある。与一郎の父御、藤孝ふじたかどの、山城の勝竜寺城しょうりゅうじじょうのあるじだ。

この父が、数年前都の奉行人おぎやうにんであつたころ、將軍家の家臣だつた藤孝どのは、最も親交があつた。いまは將軍家を離れて織田家の家臣になつておられる」

さらに父は言つた。

「細川家は文の家でもある」

もともと將軍家の家臣だし、その上藤孝の母方は、公家くげの清原家だから風雅のたしなみが深い。げんに藤孝は、「古今伝授こきんでんじゆ」をうけている。

「古今集には秘伝があつてな。連歌法師そうぎの宗祇そうぎから三条西家に伝えられたそれを、つい先年うけられたと聞いた」

「古今集」と聞いて、お玉は、そのとき、ひどく落着かない顔をした。というのは、二、三年前に母からその中の数首を書いてもらつておきながら、手習いをまるきり怠けていたからだ。「古今伝授」をうけた男しやうとどののいる家に嫁ぐとなれば、少しは手習いにも身を入れねばなるまい。

そこでかくは俄か仕立の手習いになつたのだ——お玉は、そんな滑稽じみた無邪氣さを持ちあわせている少女であつた。

が、お玉の筆は、まもなく余り動かなくなつた。

袖、ひ、ぢ、て……

ややたどたどしげな文字の書かれた紙は数枚散らかつていて、当のお玉は、筆を握つたまま、黒い瞳をあらぬ方に遊ばせている。陽気で屈託のなさすぎる少女にとっては、こうした我慢のいる丹念な稽古は性にあわないらしい。

かといって、その日のお玉は、手習いに倦いてぼんやりしているというのでもなさそうだった。黒い瞳に映っているのは何なのか。障子の外、坂本城の眼の下にひらけた群青色ぐんじょういろの琵琶湖の水の面か、その上をかすめるように飛んでゆく白い鳥の群か。

いや、彼女のみづめていいるのは、そうしたものではないらしい。もっとはるか彼方のものを追いかけていっているようでもある。そっと心の中にかくしているものをとり出して、人知れずあたためているようでもある。それは子供っぽい眼ではなく、あきらかに大人の世界に足を踏み入れた眼だ。が、いっばしの物思いにふけりながらも、まだそうしたものに馴れていないといったおぼつかなさをごこかに残している眼の色だった。

ともあれ、彼女は、いま何かに心をとらわれている。その証拠に、侍女の荻野おぎのがそっと後の襖ふすまをあけて入って来たのに、まだ気づいてもいないらしい。

「姫さま」

荻野は小さく呼んだ。

お玉はふと我に帰った。急いで筆を持ちなおし、眼を伏せたがもう遅かった。

「お手習いにはお倦きになりましたか」

よちよち歩きのとときからつき従っている荻野は微笑し、ちよつとたしなめる口調になった。

「いいえ」

お玉は勝気に首を振る。

「ちよつと考えごとをしていたの」

「何をでございます」

「それはいえないわ」

いきいきとした眼で、いたずらっぽく言った。

そのとき考えていたこと——それはいわば彼女の秘密ともいうべきものであった。いや正確に言えば、父光秀と彼女の間に数年間しまわれていた「秘密」なのであった。

「秘密」と言つては大げさかもしれない。が、数年前の彼女にとって、それは、手にあまるほどのすばらしい「秘密」だった。他愛なく無邪気で、いささか移り気でもある彼女は、やがてそのことを忘れてしまつていたけれども。

数日前の父の一言は、ふいにそれを思いださせた。細川に嫁ぐことを告げたあとで、一礼して退^きがろうとしたとき、つと眼をあげた父は言つたのである。

「おお、そうであつた。お玉、憶えておろうな、数年前、離れにいた客人のことを」

お玉が肩をぴくりとさせたとき、瞳の色を一段とやさしくして、父は声を低めた。

「細川藤孝どのはな、あの客人、三淵藤英ど^{おとうと}の異母弟なのだよ」

「まあ、あの小父さまの——」

ぱっと眼を輝かしたお玉に、光秀は何か言いかけて口を噤^{つぶ}んだ。が、どうやらお玉の方は、そんな父には気づかなかつたらしい。ふいによみがえつて来たその人の記憶に、はやくも心を奪わ

れてしまっていたからでもあろうか。

その人がやって来たのは、お玉たちが坂本城に来てまもなく、——元龜げんきから天正に移るころだった。それは光秀、いや明智の人々にとっては、心労とよろこびごとが錯綜して現われる、まことに多忙な時期であった。

当時光秀は、木下藤吉郎等とともに、都の行政にたずさわる奉行人だった。信長が、流浪していた將軍義昭を奉じて京入りしたのはその五年ほど前のことで、以来光秀は、將軍、朝廷、公家を相手に、所領問題をはじめ、ややこしい折衝を重ねていた。いずれも一筋縄でゆかない相手を適当に操るのは氣骨のおれる仕事だったが、彼はその手腕のみごときによって信長に認められ、めきめき頭角を現わしはじめていた。

交渉の相手の中でも難物は將軍義昭だった。小人物のくせに權謀好きで、ともすれば信長を無視しようとするので、両者の間には摩擦が絶えず、ついに武力衝突をひきおこしたりした。こうなれば、もちろん光秀は兵を率いて出陣しなければならなかった。

しかも、この慌しい騒乱の中で、明智家は、いまひとつ別の、華やいだ渦が巻きおこりかけていた。次女のお菊の結婚がきまったのだ。嫁ぎ先は織田信長の甥にあたる織田信澄のぶすみ、都から岐阜への帰途、坂本城に立寄った信長が、挨拶に出た娘たちの中で、大柄ではでな顔立ちのお菊に眼をとめ、その場で、なかば命令的に縁談をまとめてしまったのだ。独断的で癪癖かんべきの強いこの主人

は、思いのほかにも照れ屋でもあり、人に好意的な申し出をするとき、かえって強圧的な言い方をするのである。

織田信澄は信長の弟の信行のぶゆきの息子である。父の信行が相続争いで信長に殺されていることに、一抹の不安がないではなかったが、まず主人の血筋にあたる青年との縁談は悪いことではない。しかも信澄は、そのころ浅井家にそむいて織田側についた磯野員昌いそのかずまさの居城、佐和山城さわやまじょうを預ることが予定されていたから、お菊は、結婚と同時に城主夫人となるはずだった。

お菊の結婚がきまると、それを追いかけるようにして、姉のお倫の縁談もまとまった。そのころ信長に帰属した摂津せつづの勇将、荒木村重あらきむらじけの嫡男、村次むらつぐがその相手である。

光秀はその間ほとんど戦陣にあった。さきに叛旗をひるがえした將軍義昭を都から逐い出すと、引続き周辺の平定に移り、さらには大和へと、確実に信長の版図はんどを拡げていった。浅井、朝倉などの近江以北の有力武將が次々滅ぼされたのもこのころである。

幼いお玉には、もちろん、こうした世の中の動きはわかっていない。せいぜい彼女の眼に映ったのは、ものものしい具足をつけた侍たちが、度々城に満ちては消えていったというくらいなもので、関心は専ら二人の姉の婚礼のほうにむけられていた。婚礼当日の裨褙うちかけは白綾、それも幸菱さいわいを散らせたものときまっていたが、母の膝の上にひろげられたそれは、まばゆいばかりの白さで、手をふれるのがこわいようだった。

「これをお姉さまがお召しになるの？」

お玉は、そっと撫でては溜息をついた。

「そうですよ。そなたもお嫁入りのときは、こういうのを着るのよ」

母にそう言われても、嬉しがるよりも、むしろ信じられないというような表情をお玉はした。「その人」と顔をあわせたのはちょうどそのころであった。内外の慌しさにまぎれて、人々は、この城の離れにひっそりと住みついている人に、ほとんど気づいてはいないようだったが、例の好奇心から一人で城のあちこちを飛び廻っていたお玉は、庭に向って端坐しているその人を見つけてしまったのである。

ふしぎなことに、庭を向いて端坐していながらその中年の人は、決して庭を見ようとはしなかった。離れをかこむ植込みは低く、東と南をあけた部屋からは、漣きりぎりすを光らせている琵琶湖も、城の背後に連なる緑濃い山なみも、ほしいままに見渡されるのに、その人は、眼をなかば閉じ、すべての景色を拒否して端坐しつづけていたのである。

その場から足をしのばせて帰ったお玉は、折よく帰城していた父に、その人について、たずねずにはいらなかった。

「お離れにいらっしゃるお客様はだあれ？」

父はかすかに眉根をよせたようだった。

「むやみにのぞき見をしてはいけないな、お玉」

が、お玉は父から叱責しつせきをうけたという気はしなかったようだ。もともと口やかましく叱ったことのない父だし、

——むやみにのぞき見をしてはいけない。